



I-OWA マンスリー・セミナー講演より お金の過去・現在・未来(2)

講演： 岡本 和久
レポーター： 赤堀 薫里

日本で最初に流通した貨幣と言われる無文銀銭、富本銭、和同開珎の時代から現在に至り、さらに暗号資産に至るまでお金という本質を3回に分けて歴史の中で捉えていこうと思います。今日は第2回目江戸時代を中心にお話します。

徳川家康が征夷大將軍になったのが1603年です。大政奉還があったのが1867年。江戸時代は264年続きました。イメージ的に江戸時代は封建制度と鎖国の時代と思われがちですが、鎖国が完全に完成したのは家光の時代です。ですから完全な鎖国の時代は121年しかありません。しかも、出島などを通じてオランダや中国から様々な情報や知識が入っていました。各藩は長崎に留学生を派遣して世界の情報をそれなりに得ていました。



封建制度といっても、武士が一番強かったのは家康、秀忠、家光までの3代目くらいまで。そこから貨幣経済が浸透していき、町人や商人の力が非常に強まり、お金というものがどんどん世の中に広まっていったそんな時期でした。

江戸時代のちょうど真ん中のあたり、吉宗の頃や田沼時代にかけて、環境が非常に変わります。人口の増加が止まったことと米の石高が頭打ちになってしまい、経済は横ばいになってしまった。その頃から享保の改革、寛政の改革、天保の改革などが次から次へと起っていく。そんな時代に入ってきました。

徳川家康が江戸に移住したのが1590年。秀吉は通貨発行を規制せず、誰でも基本的に通貨を発行してよいですというスタンスでしたが、家康はそれを独占しました。室町時代までは幕府はお金に対して一切関わらず朝廷が仕切っていました。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

信長、秀吉はそれを武士の手に移そうとしていました。さらに家康が幕府を作ったところで、どんどん貨幣政策が幕府によって独占化していきました。金貨は後藤家。銀貨は大国常是、この二つの家に独占権を与えて金貨銀貨を作り出したのです。

一つ面白いことは、東の金使い、西の銀使いと別れていたことです。江戸はどちらかというと金を中心に使われていました。上方は銀山が多く貿易も盛んでした。アジアとの貿易はだいたい銀で決済されていたので上方銀使いが中心でした。

東の方は金山が多いこともあり、また、平泉や、甲州の武田家の金貨制度を江戸幕府も基本的に継承しました。貿易の関わり合いも上方ほどではなかった。家康は 1608 年に法を作り、慶長金一両＝慶長銀 50 匁(もんめ)＝永樂錢 1 貫文＝ビタ 1000 貫文と同じであると、交換比率を決めました。

今みたいに 5 円玉、10 円玉 100 円玉などの種類があるわけではなく、一つの銭がどんな銭でも全部一文でした。だから字が読めなくてもお金が使える。ただ、余り汚くなった貨幣は排除してそれをビタ銭と呼びました。ビタ銭の多くは平安時代から続いている渡来銭です。中国の北宋でだんだん貨幣が紙幣に換わる過程で、余った硬貨が日本へ大量に流れ込んできたものを使ったわけです。金銀銭の交換比率を決めたことは、非常に大きな出来事でした。2 代目の将軍は秀忠。1635 年に家光が征夷大將軍になりました。

翌年 1636 年、ビタ銭を国内で発行した通貨に変えようというので鑄造されたのが寛永通宝です。寛永通宝一枚が一文です。寛永通宝の一文銭を基準銭として銀貨や金貨の価値を決める。そういう意味では銭が統一化されてきた。江戸は金中心。上方は銀中心でしたが。両方共通して使えるのが銭ということです。江戸時代の初期の段階は経済が非常に発展していたので、銭が不足したため、縄をよってそこに穴のあいたお金を入れたさしものをしていました。

4 代目家綱の頃になると、だんだん銭が統一されてきます。この当時の貨幣の交換比率は、金一両が 4 進法です。1 分金が 4 枚で 1 両。1 分が 4 朱ということですから、4 分金が 16 朱ということになります。

講演の後半では、江戸時代の生活スタイルや生活費、複数のお金を使用するうえ、毎日変動するレート複雑さについての解説。

紙幣の登場から綱吉幕府下の荻生重秀の政策で旧貨を素材にして新しい通貨を作り、改鑄が始まりました。これは新井白石の正徳の治を除き江戸時代を通じて行われました。田沼政権が発行し、関東で特に流通した寛永通宝四文銭(波銭)、松平定信の寛政の改革、開港前夜に出てきた



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

天保通宝、ペリー来航で大量の金貨が流出することになった経緯や、新貨条例から国立銀行改行、日本銀行が設立し金本位制度に至るまでを解説くださいました。